

# 『勸修作福念仏図説』の印施と影響

——獅谷忍澂を中心として——

松 永 知 海

## はじめに

中国福建省より承応三年（一六五四）に來朝した隠元（一五九二—一六七三）をはじめとする黃檗宗の一行が有形無形に日本の文化に影響を与えたことはよく知られているところである。

隠元は徳川幕府の援助のもとに一六六三年京都宇治に黃檗山万福寺を開堂する。その黃檗宗がどのようにみられていたか、その一例をあげてみる。幕府は寛政四年（一七九二）、つまり隠元が黃檗山万福寺を開堂して約一三〇年後、幕府おほかえの儒者柴野栗山等に命じて京都・奈良の寺社約九十ヶ所に伝わる宝物の現存目録を作成させている。<sup>①</sup>そのなか、百点以上の宝物が報告されているのは、梅尾高山寺（一二二点）・法隆寺（一一五点）・東大寺（一二二点）・黃檗山万福寺（二六〇点）である。諸名利をさしおいて開山して間もないこの万福寺が宝物数第一であることは注目に値するところである。そしてその宝物の品名をみると、隠元・木庵・即非をはじめとする渡來僧の書画、あるいは法像・語録などが多数ある。その凡例<sup>②</sup>には、

慶長以後之物、宸翰世御代之御筆之外ハ格別之品ニ茂無之物者相除申候。

といい、これらを他の寺社に記載されている宸翰類や奈良朝より伝わる文物と比較してみるならば、近世の文物がこれほど重く取り上げられていることは極めて異例のことといえよう。

宗教界に目をむけると、当時各宗派がそれぞれの宗祖の教えのもとに個別に教義を説いていたのに対し、隠元自身は『臨済正伝第三十二世』を称しているものの実際には念仏禪という明末の仏教をそのまま日本に持ち込んだのである。この禪と浄土の教えが一体となって一宗を形成していること一つをとってみても、日本の宗教界には新鮮な驚きであって、とくに臨済宗をはじめとする禅宗系や浄土宗をはじめとする浄土系の宗派の僧侶の中には黄檗僧と親交をもつ者が多数あらわれ、妙心寺派龍溪のように改派する者まで現われた。<sup>③</sup>

そういう親交をもった僧侶のなかに、浄土宗では忍激（一六四五—一七一）・義山（一六四八—一七一）といった当時の浄土宗を代表する学僧がいた。彼らが黄檗宗第四代独湛と親交があったことは筆者も述べたことがある。<sup>④</sup>それは独湛が日本に来て驚嘆感激し、逆に中国に持ち帰らせ、そして自らが描き、さらにその縁起までも出版した当麻曼荼羅図をめぐる二師との道交である。そして、ついには独湛に

念仏法門、如圓光大師、可修。

といわせるまで、法然浄土教に傾注していく一端を述べたのである。これについては忍激・義山をはじめとして独湛をとりまく浄土宗の人々が影響を与えたようである。

しかしそれとは反対に独湛から影響を受けたもの、正確にいえば独湛を通じて日本にもたらされたものの中には近年にまでその影響が及んでいるものがある。そのなかに『勸修作福念仏図説』という作福と念仏を人々に勧めることを目的につくられた、いわゆる念仏図がある。以下、忍激を中心にその印施と影響について述べてみたい。

① 『寺社宝物展覧目録』五卷『続々群書類従』第一六卷所収。

② 『幸田成友著作集』第六卷二二八頁。

③ 平久保章著『隠元』一四八頁。

④ 「黄檗四代独湛和尚攷」(坪井俊映博士頌寿記念佛教文化論攷)所収)

## 一 独湛将来の『勸修作福念仏図説』

独湛と『念仏図』については、すでに禿氏祐祥先生がその起源と伝播を明らかにし、大賀一郎先生には独湛その人となり全体をとらえる研究があり、近年長谷川匡俊先生は諸往生伝研究を足掛りとして独湛にアプローチされている。

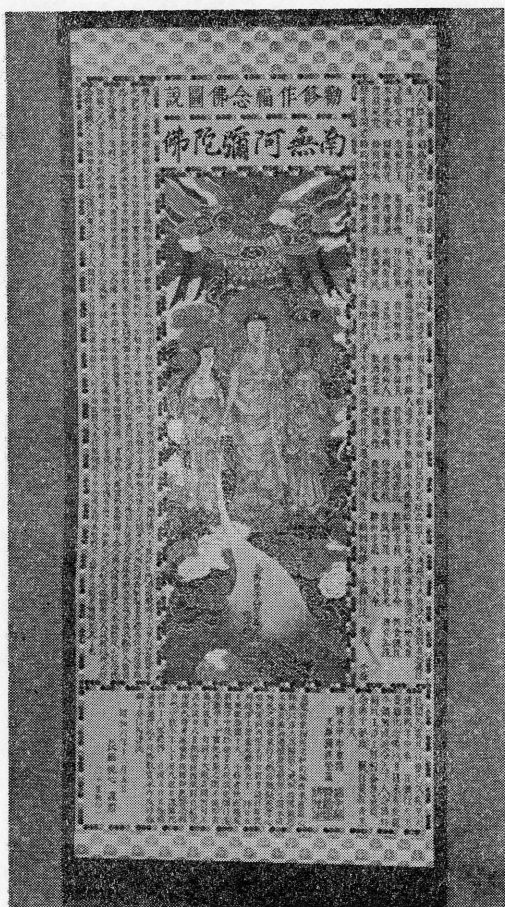
それらを概観すると、念仏を申すときに、その遍数を記す方法として、隋末唐初頃には豆などの穀類や数珠などの使用があり、これらに遅れて宋代に念仏図が考案され、元・明代へと受け継がれた。この明末の念仏図を携え渡来した独湛が印施した念仏図をもとに刷られた念仏図は忍濃の二十一万八千張をはじめとして九版も数えるように流行した。その背景の一つとして、信仰と道德の兼備実修を勧説する『念仏図』布教法は民衆教化の任務を負わされた幕藩制社会の仏教教団にとって歓迎されるものであったからである、という。

独湛はよく「念仏の独湛」と呼ばれているが、浄土宗の僧侶にはどのように思われていたのであろうか。珂然(一六六九—一七四五)はその著『獅谷白蓮社忍濃和尚行業記』につきのように記している。

本邦黄檗山第四世獨湛禪師乃普照國師隱元老和尚嫡子。嘗從三國師二不憚三鯨波之險二附三海船二東遊三本邦。禪師佩三西來直指心印二而以三淨土二爲三歸宿之地。恒唱三佛號三誦三彌陀經二日爲三常課二爲人度生亦唯以三念佛三昧二心無二他務一

このような念仏を事とし西方に心をかける独湛であつたからこそ、忍激や義山との道交があつたのであろう。忍激が『作福念仏図説』を与えられ印施したのもそのような道交のうちに成なされたものであつて、忍激の伝記にはつぎのようにある。<sup>③</sup>

是故師與禪師二道交和陸屢爲三面謁禪師欲刻二作福念佛圖二廣爲三印施二勸人念佛。一日禪師囑師謂曰。餘也本支那產、倭漢異音、言語多泥。譯人重沮、意緒難達。是故余身、未足三以爲勸導之首二煩弘通二唯師計之。師勝緣委托不<sub>レ</sub>得二固辭二遂即諾之以<sub>二</sub>倭圖<sub>一</sub>爲已任。蓋自<sub>二</sub>獅谷<sub>一</sub>印施者既二十一萬八千餘圖也。



黄檗堂所蔵『勸修作福念仏図説』第十版

この会話がなされたのは、前後の記事より元禄十三年（一七〇〇）のことであるから、法然院蔵版の『作福念仏図説』が印施される六年前ということになる。

さて前置が長くなったが、『勸修作福念仏図説』とはどのようなものであるのか。その右側にはつぎのような説明がある。

人天路上作福爲先。生死海中念佛第一。人間天上快樂逍遙。皆因廣作諸福。最緊最要。故曰爲先。若欲高出人天。速超生死。直登不退。則有念佛往生一門。最尊最勝。故曰第一。

つまり人間が氣持よくゆつたりと生きていくにはまず作福をしないさい。生死のまよいを超えようと思えば念仏を第一にしなさい、というのである。この「人天路上」の一句は中国の念仏図としてよく使用されていたようであって、後述する廈門で刊行された念仏図に同様の一句がある。

つぎに偈をだしている。

作福不念佛。福盡還沈淪。念佛不作福。入道多苦辛。無福不念佛。地獄鬼畜羣。念佛兼作福。後證兩足尊。

このように作福と念仏のふたつともに修することを勧めているのである。作福すれば今世の苦なく、念仏すれば来世の成仏を約束している。さらにつぎのように具体的な作福の項目をだしている。

孝順父母。	忠報君王。	裝塑佛像。	印造經典。	齋供僧伽。	敬事師長。	營修寺宇。
流通善法。	禁絕宰殺。	買放生生命。	飯食饑民。	衣濟寒凍。	開掘義井。	修理橋梁。
平砌街道。	普施茶湯。	看療病人。	給散藥餌。	伸雪冤枉。	出減刑罪。	安養衰老。
撫育孤孩。	埋藏屍骨。	給與棺木。	饒免債負。	義讓財產。	還他遺失。	救濟患苦。
祈禳災難。	薦拔亡鬼。	勸和爭訟。	生全人命。			

ここで注目すべきことは、第一にあげである孝順父母の項は雲棲株宏（一五三五—一六一五）の著わした『自知錄』のなか、善門の第一孝類のはじめに「事父母致敬盡養」ということと一致する。また全体をみても後述するように『自知錄』の説く所とよく合うのである。この作福の説明のあとには念仏をつぎのように勧めている。

無事。身閒者。時時勤念有「事纏」身者。早晚課念至心發願。求「生」淨土。平日遇「福」便作「作」訖還念。即以「所作之福」回向「淨土」。求「願」往生。善人 受持

このように、念仏は作福の説明とはちがひ具体的には説かず、その人なりに念仏して往生を願求しなさいといい、最後にこの図を受持した人の名を記すようになってゐる。

一方左縁には、傳大師の言葉を引きながら「無常迅速、生死事大」のことをつぎのようについて。

傳大士云。漸漸雞皮鶴髮。看看行步龍鐘。假饒金玉滿堂。難免「生老病死」二「汝」千般快樂。無常終是到來。惟有「三經路」修行。但念「阿彌陀佛」。大士此語正所謂萬般將不「去」。惟有「業」隨「身」者也。如何。是萬般將不「去」。人生所有官爵。金寶。屋宅。田園。飲食衣服。玩好。乃至嬌妻愛子無常到來。那「一件」是將得去者。如何。是惟有「業」隨「身」。人生所「造」諸貪瞋癡業。非禮姦姪。恣意宰殺爲「子逆父爲臣欺君」尅衆成「家」。陰毒害「物」種種惡業。無常到來。這都緊緊隨「著」。爾「者」既然如是。若不「猛省」回頭改「惡」。從「善」洗「心」。念佛。豈非「徒得」人「身」。虛生浪「死」。上「苦哉苦哉」。

この傳大師の語は、株宏の『往生集』①の善導和尚の頃に「勸世偈」として見い出せるものである。ただ「難免生老病死……」の語は「豈免衰殘病苦」となっているだけである。この「人生所有……」以下の文は法然の『登山狀』にも老の表現が通ずるところがあるように思う。②

つぎに世の中の人をつぎのように分けて、それぞれの立場において念仏を勧めているのである。

我「觀」世人。箇箇皆好「念佛」。今三等「列」之。一「者」極閑人。應「當」無「晝」無「夜」。一心念佛。二「者」半閑半忙人。應「當」營「事」。已畢。即便念佛。三「者」極忙人。應「當」忙裏偷「閒」。十念念佛。又復富貴之人。衣祿豐足。正好「念佛」。貧窮之人。安「貧」。守「分」。正好「念佛」。有「三子孫」人。得「人」替「力」。正好「念佛」。無「三子孫」人。心無「牽掛」。正好「念佛」。無病之人。身力

康健<sup>カレヘニ</sup> 正好<sup>ニ</sup>念佛<sup>スルニ</sup>。有病<sup>ニ</sup>之人。知<sup>レハ</sup>死<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>久<sup>カ</sup>。正好<sup>ニ</sup>念佛<sup>スルニ</sup>。聰明<sup>ニ</sup>之人。通<sup>ル</sup>經達<sup>ス</sup>。理正好<sup>ニ</sup>念佛<sup>スルニ</sup>。愚鈍<sup>ノ</sup>之人。無<sup>レハ</sup>雜知見<sup>ハ</sup>。正好<sup>ニ</sup>念佛<sup>スルニ</sup>。以<sup>テ</sup>要言<sup>ヲ</sup>之。天上人間四生九有皆當念佛<sup>ス</sup>。奉<sup>ル</sup>勸<sup>ム</sup>世人。何不<sup>レ</sup>趣<sup>テ</sup>此四大未<sup>レ</sup>作<sup>ラ</sup>之骷髏<sup>ト</sup>。時<sup>ニ</sup>早<sup>ニ</sup>早<sup>ニ</sup>念佛<sup>ス</sup>。直待<sup>ニ</sup>萬般<sup>ニ</sup>將<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>去<sup>キ</sup>。惟有<sup>レ</sup>業<sup>ヲ</sup>隨<sup>フ</sup>身懊悔<sup>スル</sup>。無<sup>レ</sup>及<sup>フ</sup>了也。

そして下縁には独湛のつぎのような識語がある。

此圖<sup>ヲ</sup>於<sup>テ</sup>震旦<sup>ニ</sup>行<sup>レ</sup>世<sup>ニ</sup>已久矣<sup>ニ</sup>。至<sup>テ</sup>大清康熙年中<sup>ニ</sup>。奉<sup>テ</sup>旨<sup>ヲ</sup>頒<sup>テ</sup>行<sup>テ</sup>天下<sup>ニ</sup>。普勸<sup>ニ</sup>化念<sup>ス</sup>佛<sup>ヲ</sup>。豫得<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>張<sup>ニ</sup>與<sup>ニ</sup>無<sup>レ</sup>塵居士<sup>ニ</sup>。奉持居<sup>ス</sup>士以<sup>テ</sup>日國未<sup>レ</sup>有<sup>ニ</sup>此圖<sup>ニ</sup>。今鐫刻流通<sup>ス</sup>。令<sup>ニ</sup>天下人<sup>ニ</sup>念佛修福同生<sup>ニ</sup>淨土<sup>ニ</sup>。則利益無量<sup>ナリ</sup>焉。念佛千聲填<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>圈<sup>ニ</sup>。白黃紅青黑可<sup>レ</sup>填<sup>ム</sup>五次<sup>ニ</sup>。

寶永甲申重陽 支那獨湛證識

獅子林  
普勸念  
仏往生

この無盡居士は義山とも親交があり、當麻曼荼羅や清海曼荼羅などの模写も行なった人である。

以上概説した『勸修作福念仏図説』の初版は黄檗の獅子林蔵版であるが、以後九版あったといわれている。このうち第三版以降は原則として、つぎの忍激の識語を付して印施されるのである。

黄檗四世獨湛老和尚佩<sup>ヲ</sup>西來直指心印<sup>ヲ</sup>。而以<sup>テ</sup>淨土<sup>ニ</sup>爲<sup>ス</sup>歸宿之地<sup>ニ</sup>。恒持<sup>ニ</sup>佛號<sup>ヲ</sup>。息不<sup>ニ</sup>虛耗<sup>ス</sup>。禮誦禮懺<sup>ヲ</sup>。嘗暫<sup>ニ</sup>停<sup>ニ</sup>可<sup>レ</sup>謂<sup>フ</sup>。永明角虎之禪<sup>ヲ</sup>。也衰朽已極<sup>ニ</sup>。而無<sup>レ</sup>微疾身心怡悅<sup>ス</sup>。常面<sup>ニ</sup>西坐<sup>ス</sup>。正月廿四日語<sup>テ</sup>曰<sup>ク</sup>。昨夜禪<sup>ニ</sup>遊<sup>ス</sup>。淨土<sup>ニ</sup>。即奮起<sup>テ</sup>。禮<sup>ニ</sup>西方<sup>ニ</sup>。十一拜<sup>ス</sup>。廿五日。晚鶴聲聞<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>天<sup>ニ</sup>。二小侍者怪<sup>シ</sup>。而趨<sup>レ</sup>庭<sup>ニ</sup>。則聞<sup>ニ</sup>空中微妙樂音<sup>ヲ</sup>。其夜深更師曰<sup>ク</sup>。適夢<sup>ニ</sup>蓮華生<sup>ニ</sup>于寶池<sup>ニ</sup>。西歸<sup>ス</sup>之期不<sup>レ</sup>遠<sup>カ</sup>。即書<sup>レ</sup>偈曰<sup>ク</sup>。我有<sup>ニ</sup>一句<sup>ニ</sup>別<sup>ニ</sup>于大衆<sup>ニ</sup>。若聞<sup>ニ</sup>何句<sup>ニ</sup>。不說不說<sup>ス</sup>。廿六日依<sup>テ</sup>常面<sup>ニ</sup>西辰刻自結<sup>テ</sup>定印<sup>ヲ</sup>。寂然<sup>ニ</sup>。侍者連<sup>テ</sup>喚<sup>フ</sup>。和尚<sup>ニ</sup>。師即應<sup>テ</sup>聲<sup>ニ</sup>念佛<sup>ス</sup>。泊然<sup>ニ</sup>。坐脫<sup>ス</sup>。今年七十有九也。日課彌陀經四十八卷。禮佛三百或五百。其餘禮誦課簿所<sup>レ</sup>記不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>勝數<sup>ス</sup>。寶永丙戌仲春獅子谷信阿謹誌。

このように忍激は、独湛の信仰を「浄土を以て帰宿の地とす。恒に仏号を持して、息虚しくかよわず」といい、彼の臨終の瑞相を記し、さらに日課に阿弥陀経を四十八巻、礼仏を三百あるいは五百、とその浄土信仰を述べている。ところで、大賀一郎先生が九版ありと紹介された開版のうち第七版は独湛の詩をのせているものの表題に「勸修作福百万遍二世安樂圖説」とあるから、後述する百万遍念仏図の類に入る。また禿氏祐祥先生は宝永六年版が、山本悦心先生は大正六年本があったことを報告しているから整理してみるとつぎようになる。

第一版 宝永元年（一七〇四）九月 黄檗獅子林

第二版 “ 十一月 “

第三版 宝永三年（一七〇六）二月 獅谷法然院

第四版 宝永六年（一七〇九）冬

第五版 享保七年（一七三二）正月 浜松大雄庵

第六版 明和八年（一七七二）春 洛東雲蓋院

第七版 安永七年（一七七八）春 黄檗獅子林

第八版 明治三十二年（一八九九）二月 姫路雲松寺

第九版 大正六年（一九一七）三月 黄檗三十三開戒紀念

第十版 昭和六年（一九三一）十二月 名古屋黄檗堂

この十本のうち、第二、第四、第九の三本は未見であるが、それぞれの特徴を初版と比較し記してみるとつぎのようである。

第三版には忍激の識語がはじめてつく。



第五版には右縁の説明の最後に「莊嚴福慧」の四文字が入り独湛の識語も少しく改変されている。また他の本が弥陀三尊の来迎相を描いているのに対し、弥陀一仏だけである。

第六版には独湛識語がなく、かわりに貫春の識語が入っている。

第七版には忍激の識語がつき、独湛の識語から「予得一張<sup>⑩</sup>与無盡居士<sup>⑪</sup>奉持居士」がなくなっている。

第八版は第七版に鍔富の識語をつけたもの。山本悦心氏がその識語を『黄檗』六号に載せている。

第九版は同じく山本氏が紹介しているのであって、第三版をもとに黄檗第三十三開成の記念として五百張を印施したものである。

第十版は第八版をもとに独湛と忍激の識語を入れたものである。

第四版は禿氏先生が紹介しているものであって、忍激の識語があり、つぎのようにある、

此圖流通逐年彌盛、但以今年唐紙甚貴、改刻圖說<sup>⑫</sup>、易以和紙<sup>⑬</sup>、蓋便於印施<sup>⑭</sup>、勿<sup>⑮</sup>恠、

寶永己丑冬日獅子谷老人書

この『作福念仏図説』の流行を述べており、これには忍激の伝にあるように「獅谷蓮社印施總計廿一萬八千張」の朱記がある、<sup>⑩</sup>ということである。

以上、独湛の『勸修作福念仏図説』を概観し、諸本の比較をしたが、その特徴はその表題のとおり、今世のための作福と、来世のための念仏を勸修する図と説ということがいえる。またその印施は近年に至るまで行なわれていることがよくわかるのである。

註

① 「念仏図の起源並に伝播」(『龍谷史壇』二卷一号 昭

和四年)

『勸修作福念仏図説』の印施と影響

- ② 「黄檗四代念仏禪師独湛和尚について」(『浄土学一八・二九合輯号 昭和一七年』)
- ③ 「近世念仏者と外来思想—黄檗宗の念仏者独湛をめぐる—」(『季刊日本思想史』第二二号 昭和五九年)。
- ④ 『浄土宗全書』第一八卷二二頁上。
- ⑤ 『浄土宗全書』第一八卷二二頁下。
- ⑥ 牧田諦亮先生架蔵(『アジア仏教史中国編Ⅱ 民衆の仏教』七一頁図版)
- ⑦ 『統浄土宗全書』第一六卷二二二頁上。
- ⑧ 『勅修御伝』第三二卷「妻子眷属は家にあれどもともなはず、七珍万宝はくらにみても益もなし。ただ身にしがふものは後悔の涙也。ついに閻魔の庁にいたりぬれば、つみの浅深をさだめ業の輕重をかんがへらる。法王罪人にとひていはく、なんち仏法流布の世にむまれて、なんぞ修行せずしていたづらに帰ってきたるや。その時にはわれらいかがこたえんとする。すみやかに出要をもとめて、むなしく帰る事なかれ。」彼此の国情により具体的表現は少しちがうが、死の一点をもってこの世の
- ⑨ 無常を説き念仏による来世往生をわかりやすく説く点はよく共通している。
- ⑩ 『黄檗』第六号二二頁、大正九年。  
明和辛卯本  
元禄壬午東叡山凌雲院第五世大僧正清白慕盧阜之風結一勝社命曰即心焉意欲即心念佛不隨偏漸之修也。大僧正弟子僧都義圓謀衆捐財翻刻黄檗所藏劈窠圖永爲社物欲普施天下縉素勸修淨業其志不亦善乎至第七世大僧正實觀記其事於圖面彌募有所志欲以此圖與 萬人俱同即心念仏、因新刻本圖以印施云  
明和辛卯秋七月吉旦  
雲蓋院第十主釋僧正實春誌  
唱名千聲  
當填千圈  
満圖千箇  
成百万遍
- ⑪ 前掲禿氏先生論文。

## 二 忍激における作福

独湛が将来した『勸修作福念仏図説』は清の康熙年中(一六六二—一七二三)に流行した念仏図の一本であるという。しかし一方では牧田諦亮先生が紹介しておられる念仏図のように、作福を説かず、念仏によって自身および

父母眷屬等の西方往生をねがい、増福延寿を祈るものもある。

この図は最上に「阿彌陀佛接引念佛善人往生西方」と題し、その下に阿彌陀立像が描かれ、右手を下に垂らし、さらにその下には諸善人を乗せた船（この船全体が白圈で輪郭がとられていて、ぬりつぶすことによって船が完成する）が描かれている。そして阿彌陀仏の右手から二本の線がこの船を接引するように描かれている。船の客室前は門のような形をしており、その扁額部分には「般若慈航」と横書きしている。これは延寿の『万善同帰集』巻下に「駕大般若之慈航、越三有之苦津」というあたりを典拠にしたものであろう。その門の柱聯のように左右には、  
人天路上作福為先

#### 生死関頭念佛第一

とあり、帆にあたる部分には、つぎのような句がある。

- 一句彌陀、是斬群邪之寶劍。
- 一句彌陀、是破地獄之猛將。
- 一句彌陀、是照黑暗之明燈。
- 一句彌陀、是渡苦海之慈航。
- 一句彌陀、是出輪廻之徑路。
- 一句彌陀、是脫生死之良方。
- 一句彌陀、是成仙之秘訣。
- 一句彌陀、是換骨之神舟。
- 八萬四千法門、六字全收。

一千七百葛藤、一刀斬斷。

一句彌陀無別念。不勞彈指到西方。

ここに「一千七百葛藤」というのは禪の公案を指すものであり、禪淨双修が主流の明末仏教にくらべ淨土のみを説いていることがわかる。さらにつぎの詞書が一層それを明らかにしている。

修行徑路、方便多門、直捷簡易、無如念佛。念佛一法謂之求生西方。又謂之修淨土。言西方極樂世界、是清淨佛土。故三藏十二部經、經經導歸極樂。八萬四千法門、門門勸往西方。念佛法門乃最勝第一、無上方便之法門也。古德云、餘門學道如蟻子上高山、半時一步。淨土修行似風帆行順水須臾千里。一入西方永無退墮。上品即登佛階、下品猶勝天宮。其功最高、其行甚易。不論貴賤賢愚、老幼男女、喫葷喫素、出家在家、皆可行之。奉勸十方善男信女、有緣遇此即發信心。一心念佛、求生西方。如或家務牽纏、世緣未了、不能一心者或每日持念三千五千、作爲常課。如再不能、念此圖一張爲一願。念一百點二圈、點滿共計二十五萬。或爲自身、求生西方、或爲父母、求生西方、或爲父母保病祈安、增福延壽。皆佛前焚。或追薦過去父母。六親眷屬、靈前及墓上焚。化佛前亦可。或酬謝神明。或祭祀宗祖。或每年清明冬至、七月十五日、臘月年夜念此佛圖。然孤墳義家、濟度無祀孤魂。俱可伏乘佛力。超生淨土。或一願、或多願隨力所成。所獲功德。不可思議矣。普願同發信心、同爲善友、同見彌陀、同往極樂。

以上のように念仏百遍することと一つの白圈をぬりつづせば、総計十五万遍を唱えたことになる、という念仏図である。

では、このような念仏だけを勧めるものと、作福と念仏を勧めるものと、どちらが「念仏図」の主流をしめてい

たのであろうか。結論をいえば、明末より清代にかけては作福と念仏の併用を説くものが流行したと考えられる。その理由は単に独湛の言葉だけを信ずるのでなく、広く当時の仏教をみると作福を説く書物が単行して出版され広く流布していたからである。

そのような書物の一つに、独湛が師とも仰ぐ雲棲株宏の『自知録』がある。高雄義堅先生は「明代に大成せる功過格思想」のなかで『自知録』を解説してつぎのように述べておられる。<sup>④</sup>

以上に列挙した各種功過格の中で、何と云っても最も完成されておるのは雲棲の自知録であらう。自知録は太微仙君や雲谷のものに比べると、徳目の分類なり、善過の評価が非常に精細になり、世間・出世間に亘つて人間生活の一切を網羅して残す所が無い。

功過格は中国民間で行なわれた道德律で、人上行為を善（功）悪（過）に分類表示して善を勧めるものであり、十二世紀ごろ作られた『太微仙君純陽呂祖師功過格』は現存する最古のもので、明代になり多数の功過格があらわれたという。雲谷禪師が袁了凡に授けた『陰陽録』に盛られる内容もやはり明代を代表する功過の書である。

さらにこれらの功過格のうち『陰陽録』と『自知録』とが、『勸修作福念仏図説』と同様に、独湛によって将来され忍激がそれを読んで感激して法然院から刊行していることも考え合せると、『勸修作福念仏図説』と功過格とは表裏一体のものとして康熙年中にも流行し、そのまま独湛が日本に将来したものといえよう。いま試みに雲棲の『自知録』と『勸修作福念仏図説』に説く作福の徳行とを比較してみよう。

## 『圖説』

### 『自知録』卷上、善門のうち

孝順父母

事父母「致敬盡養」<sup>一</sup>日爲「善」<sup>二</sup>

『勸修作福念仏図説』の印施と影響

忠報君王  
事<sub>三</sub>君王<sub>二</sub>竭<sub>レ</sub>忠效<sub>レ</sub>力<sub>一</sub> 日爲<sub>二</sub>善<sub>一</sub>

裝塑佛像

印造經典

齊供僧伽

敬事師長

營修寺宇

流通善法

禁絕宰殺

買放生命

飯食饑民

衣濟寒凍

開掘義井

修理橋梁

平砌街道

普施茶湯

看療病人

給散藥餌

伸雪冤枉

敬<sub>三</sub>奉師長<sub>一</sub> 日爲<sub>二</sub>善<sub>一</sub> <sub>三</sub>寶功德類

「救有力報人之畜」以下の項とその解

如<sub>レ</sub>上窮民收歸養膳者<sub>一</sub> 日爲<sub>二</sub>善<sub>一</sub>

濟<sub>三</sub>寒凍人<sub>二</sub>煖室<sub>一</sub> 宵<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>善<sub>一</sub>

開<sub>三</sub>掘義井<sub>二</sub>修<sub>二</sub>建涼亭<sub>一</sub> 俱<sub>二</sub>百錢<sub>一</sub>

造<sub>三</sub>橋梁渡船等<sub>一</sub> 爲<sub>二</sub>善<sub>一</sub>

平<sub>三</sub>治道路險阻泥淖<sub>二</sub>所<sub>一</sub>費<sub>二</sub>百錢<sub>一</sub>爲<sub>二</sub>善<sub>一</sub>

左記の二項に準じて考えられる。

救<sub>三</sub>重疾<sub>二</sub>十善<sub>一</sub> 一人爲<sub>二</sub>以下の項

同右

救<sub>三</sub>死刑<sub>二</sub>百善<sub>一</sub> 一人爲<sub>二</sub>以下の項

出減刑罪

安養衰老

撫育孤孩

埋藏屍骨

給與棺木

饒免債負

義讓財產

還他得失

救濟患苦

祈禳災難

薦拔亡鬼

勸和爭訟

生全人命

対応項がないが「敬奉師長」に含まれると思う。

收<sub>二</sub>養無主遺棄嬰孩<sub>一</sub> 一命爲<sub>二</sub>八十善<sub>一</sub>

葬<sub>二</sub>無主之骨<sub>一</sub> 一人爲<sub>二</sub>十善<sub>一</sub> 以下の項

死不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>殮施<sub>二</sub>與棺木<sub>一</sub> 所<sub>レ</sub>費<sub>二</sub>百錢爲<sub>二</sub>一善<sub>一</sub>

雜善類のなか「不義之財不取所直」以下「讓地讓產所直」の項まで。

救<sub>二</sub>重疾<sub>一</sub> 一人爲<sub>二</sub>十善<sub>一</sub> 以下の項

祈<sub>レ</sub>福禳災等但許<sub>二</sub>善願<sub>一</sub> 不<sub>レ</sub>許<sub>二</sub>牲祀<sub>一</sub>者爲<sub>二</sub>五善<sub>一</sub>

対応項なし

勸和<sub>二</sub>鬭爭<sub>一</sub> 爲<sub>二</sub>二善<sub>一</sub>

対応項なし

このように、その内容がよく一致するのである。

忍激が功過格を知ったのは、独庵玄光による『善哉宝訓』の出版があったことによる。<sup>⑥</sup>この刊行は元禄五年（一六九二）であるから元禄十四年（一七〇一）、忍激が『陰陽録』・『自知録』を刊行するまでは九年かかっている。その間この書の刊行を思っていたが入手できず、ある日独湛と会っていたが、話が功過格におよび、中国では僧侶も儒者も競ってこの二録を刊行していること、さらに独湛自身がかつて刊行を企て序文も作っていることなどを聞

き、そのうえそれら二録や序文をもらい、忍激は大変喜んでここに刊行した、とその跋文に記している。この功過格については他に『勸懲宝訓』や『太上感應編』なども忍激が刊行したことが伝記に記されているから彼自身の信仰にかなり深く侵透していたようで、先の二録の序文にも

益信、人間不可無此二録矣。遂強病點之捨資刊行。

と述べているほどである。このような刊行態度は宗典刊行における忍激の姿勢とは異なることが指摘できる。この二録の奥付には、

沙門信阿捨衣鉢資合刻

陰隲自知二篇廣布於世願我與衆生共極止惡修善之良心同躋了生脫死之淨域者

とあるが、この前年、忍激は法然の『選択集』を注釈した良忠の『選択伝弘決疑鈔』を五卷会本にして刊行している。そこには刊行する為、冥福の戒名をあげ白銀三百二十九錢をうけたことを記し、つぎに

選擇傳弘決疑鈔會本第五卷 伏願以此功德諸靈及以六親眷屬齊超三有苦域頓登九連樂邦者

仰冀吉水正宗流通海國一見一聞皆種淨因衆聖護念龍天歡喜風雨以時災厲不起人人皆得无量壽處處悉成安樂國と記している。両者を比較すると、『決疑鈔』の刊行は喜捨の白銀によるものであり、それを機縁として喜捨した人々等を極楽浄土に導こうとする、この種の刊行の形式にそった識語といえる。またやはり会本として元禄三年から四年にかけて刊行した善導の『観無量寿経疏』四卷、あるいは忍激七回忌にあたる享保二年（一七一七）刊行の『勅修吉水円光大師御伝縁起』一卷、『同目錄』、さらに同時代の義山が募刻した五部九卷などの奥付も同様の識語としてあげられる。

しかしながら、この『陰隲録』『自知録』の二書については忍激自らが刊行の費用を出したのであり、その跋文



も「願我與衆生」というように、「我（忍激）」が重い意味をもって、衆生はそえられている言葉であり、その「我」が止惡修善の良心を極め、了生脱死の淨域に躋らんことを願うのである。ここに忍激の信仰のなかに前述した法然の專修念仏とは異なる明末の仏教の影響をみることができるのである。

その背景には明末の四大師といわれる代表的仏教者たちの著書をはじめとする著作類や功過格などがかなり和刻されていることがあげられる。法然院には忍激の手沢本が所蔵されていて、それらを調べることによって当時の出版状況をみることができるとともに、忍激自身の関心もみることができであろう。いまこころみに四大師のうち、株宏（一五三五—一六一五）と智旭（一五九九—一六五五）の二人に限って、法然院の蔵書<sup>⑩</sup>を調べてみよう。

株宏関係

竹窗隨筆一卷

承応二年刊 一六五三

竹窗二筆一卷

〃 〃

竹窗三筆一卷

〃 〃

梵網經心地品菩薩戒義疏發隱五卷

承応四年刊 一六五五

禪關策進一卷

明暦二年刊 一六五六

菩薩戒問辯一卷

寛文六年刊 一六六六

戒疏發隱事義一卷

寛文六年刊 一六六六

直道録一卷

寛文八年刊 一六六八

雲棲大師山房雜錄三卷

元禄六年刊 一六九三

彌陀經疏鈔三卷

承応二年 一六五三

淨土或問一卷

承応二年

一六五三

佛遺教經論疏節要一卷

承応四年

一六五五

僧訓日記一卷

萬治三年

一六六〇

具戒便蒙一卷

寛文三年

一六六三

沙彌律儀要略二卷

寛文九年

一六六九

楚石西齋淨土詩三卷

寛文十二年

一六七二

智旭關係

淨信堂答問三卷

天和三年刊

一六八三

學菩薩戒法一卷

宝永四年刊

一七〇七

梵網經懺悔行法一卷

宝永四年刊

一七〇七

阿弥陀經要解一卷

延宝六年刊

一六七八

梵室偶談一卷

延宝七年刊

一六七九

見聞錄一卷

延宝七年刊

一六七九

佛說齋經科註一卷

延宝七年刊

一六七九

三千有門頌略解一卷

延宝七年刊

一六七九

觀所緣緣論釋直解一卷

延宝八年刊

一六八〇

六離合釋法式略解一卷

延宝八年刊

一六八〇

大乘百法明門論直解一卷

延宝八年刊

一六八〇

唯識三十論直解一卷

延宝八年刊 一六八〇

唐奘師真唯識量略解一卷

延宝八年刊 一六八〇

因明入正理論直解一卷

延宝八年刊 一六八〇

八識規矩直解一卷

延宝八年刊 一六八〇

大乘止觀釈要四卷

天和二年刊 一六八二

菩薩戒本經箋要一卷

天和三年刊 一六八三

般若波羅蜜多心經釋要一卷

天和三年刊 一六八三

金剛般若波羅蜜經觀心釋一卷

天和三年刊 一六八三

四分律藏大小持戒犍度略釋一卷

貞享元年刊 一六八四

天樂鳴空三卷

貞享五年跋 一六八八

佛說梵網經菩薩心地品合註五卷

元禄五年刊 一六九二

金光明懺法補助儀一卷

元禄十二年刊 一六九九

絶余編四卷

元禄十三年 一七〇〇

蓮池大師塔銘

寛文四年 一六六四

古杭雲棲蓮池大師塔銘 徳清

蓮宗八祖杭州古雲棲寺中興尊宿蓮池

大師塔銘并序

應實

雲棲本師行略

廣潤

『勸修作福念仏図説』の印施と影響

祭雲棲大師文

徳清

禮雲棲大師塔偈

朱鷺

さらに功過格についてみるとつぎのような書物がある。<sup>①</sup>

太上感應篇關係

勸善書拔萃五卷

寛文三年

一六六三

太上感應篇俗解

延宝八年

一六八〇

同箋註図説

〃

〃

〃

元禄八年

一六九五

同和解

元禄十二年

一六九九

同靈驗鈔四卷

宝永元年

一七〇四

勸善宝訓

宝永八年

一七一一

法然院所蔵の二師の著作だけにかぎっても多数見いだせるのであり、さらに明末の著作が多数入蔵されている明の万暦版をもとに刊行した黄檗版大蔵經の完成と普及は当時の日本仏教界の動向を物語るものといえよう。そしてこれらの時代の潮流のなかで、違和感なく忍激が自身の浄土信仰のなかに「作福の勸修」をもつにいたったのである。

# 註

① 前項注⑥に同じ。

② 『大正蔵』第四八卷九八七頁中。

③ 前掲拙稿参照。

④ 『龍谷大学論叢』第二四四号、大正二一年。

⑤ 元禄十四年(一七〇一)二書一具のものとして開版されている。忍激が開版する経緯については「合刻陰陽自知二録跋」に詳しい。後註の参照。ただこの二録の使用方法についてはその付録に忍激がつぎのように述べている。

「欲行<sup>レ</sup>之者、宜<sup>レ</sup>各隨<sup>テ</sup>所<sup>ニ</sup>樂<sup>ニ</sup>自作<sup>ニ</sup>格目<sup>ニ</sup>而依<sup>テ</sup>自知<sup>ニ</sup>録<sup>ニ</sup>以記<sup>ニ</sup>善過<sup>ニ</sup>。今且<sup>ニ</sup>準<sup>ニ</sup>陰陽録之所<sup>ニ</sup>載<sup>ニ</sup>唯約<sup>ニ</sup>日月而図<sup>ニ</sup>格目<sup>ニ</sup>以備<sup>ニ</sup>二年之用<sup>ニ</sup>。」

⑥ 忍激跋、註④参照。

⑦ 合刻陰陽自知二録跋

余曩<sup>レ</sup>未<sup>レ</sup>見<sup>ニ</sup>太微仙君功過格<sup>ニ</sup>又未<sup>レ</sup>聞<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>震旦僧儒盛行<sup>ニ</sup>功過格<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>故雖<sup>ニ</sup>嘗<sup>ニ</sup>見<sup>ニ</sup>雲棲自知<sup>ニ</sup>録<sup>ニ</sup>而非<sup>ニ</sup>信<sup>ニ</sup>焉<sup>ニ</sup>而未<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>行<sup>ニ</sup>焉<sup>ニ</sup>。後偶<sup>ニ</sup>讀<sup>ニ</sup>獨庵善哉寶訓載<sup>ニ</sup>積德立命學<sup>ニ</sup>始知<sup>ニ</sup>自知<sup>ニ</sup>録<sup>ニ</sup>之不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>行<sup>ニ</sup>。因自思立命一篇蓋<sup>ニ</sup>袁氏已驗<sup>ニ</sup>之靈訓<sup>ニ</sup>而亦能<sup>ニ</sup>令<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>信<sup>ニ</sup>受<sup>ニ</sup>自知<sup>ニ</sup>録<sup>ニ</sup>之寶券<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>。可<sup>レ</sup>不<sup>ニ</sup>合刻<sup>ニ</sup>共行<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>世<sup>ニ</sup>哉<sup>ニ</sup>然<sup>ニ</sup>而不<sup>レ</sup>知<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>篇<sup>ニ</sup>出<sup>ニ</sup>自<sup>ニ</sup>何<sup>ニ</sup>書<sup>ニ</sup>求<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>ニ</sup>。一日過<sup>ニ</sup>獅子林<sup>ニ</sup>問<sup>ニ</sup>湛老和尚<sup>ニ</sup>忻然<sup>ニ</sup>語<sup>ニ</sup>余<sup>ニ</sup>曰<sup>ニ</sup>立命之學具出<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>袁氏陰陽録<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>。袁氏豁<sup>ニ</sup>開<sup>ニ</sup>儒釋一貫之眼目<sup>ニ</sup>而深達<sup>ニ</sup>天地鬼神之際<sup>ニ</sup>特<sup>ニ</sup>錄<sup>ニ</sup>自<sup>ニ</sup>驗<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>乃<sup>ニ</sup>告<sup>ニ</sup>予<sup>ニ</sup>子<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>傳<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>天下<sup>ニ</sup>後世<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>。蓋<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>施<sup>ニ</sup>教化<sup>ニ</sup>而能<sup>ニ</sup>令<sup>ニ</sup>蒼生<sup>ニ</sup>兢兢<sup>ニ</sup>改<sup>ニ</sup>惡<sup>ニ</sup>行<sup>ニ</sup>善<sup>ニ</sup>者<sup>ニ</sup>莫<sup>ニ</sup>切<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>。是以支那僧儒競<sup>ニ</sup>刻<sup>ニ</sup>陰陽自知<sup>ニ</sup>二録<sup>ニ</sup>家論<sup>ニ</sup>戶曉<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>三尺<sup>ニ</sup>孺子<sup>ニ</sup>亦能<sup>ニ</sup>知<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>。嘗聞<sup>ニ</sup>日本<sup>ニ</sup>未<sup>ニ</sup>有此<sup>ニ</sup>華<sup>ニ</sup>豈<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>關<sup>ニ</sup>典<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>經<sup>ニ</sup>是<sup>ニ</sup>昔<sup>ニ</sup>作<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>序<sup>ニ</sup>而欲<sup>ニ</sup>刊<sup>ニ</sup>布<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>而未<sup>ニ</sup>果<sup>ニ</sup>焉<sup>ニ</sup>。出<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>與<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>與<sup>ニ</sup>。

『勸修作福念仏図説』の印施と影響

⑧ 余<sup>ニ</sup>看<sup>ニ</sup>先<sup>ニ</sup>見<sup>ニ</sup>龍華道人二篇<sup>ニ</sup>合刻<sup>ニ</sup>引<sup>ニ</sup>即<sup>ニ</sup>符<sup>ニ</sup>鄙懷<sup>ニ</sup>細讀<sup>ニ</sup>全篇<sup>ニ</sup>喜<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>自<sup>ニ</sup>勝<sup>ニ</sup>益<sup>ニ</sup>信<sup>ニ</sup>人間<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>可<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>二録<sup>ニ</sup>矣<sup>ニ</sup>。遂<sup>ニ</sup>強<sup>ニ</sup>病點<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>捨<sup>ニ</sup>資<sup>ニ</sup>刊<sup>ニ</sup>行<sup>ニ</sup>。於<sup>ニ</sup>戲<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>從<sup>ニ</sup>家<sup>ニ</sup>傳<sup>ニ</sup>家<sup>ニ</sup>從<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>傳<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>而傳<sup>ニ</sup>天下<sup>ニ</sup>人<sup>ニ</sup>戰兢<sup>ニ</sup>惕厲<sup>ニ</sup>造<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>止惡修善之域<sup>ニ</sup>則<sup>ニ</sup>匪<sup>ニ</sup>止<sup>ニ</sup>行<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>者變<sup>ニ</sup>禍<sup>ニ</sup>成<sup>ニ</sup>福<sup>ニ</sup>轉<sup>ニ</sup>天<sup>ニ</sup>得<sup>ニ</sup>壽<sup>ニ</sup>亦<sup>ニ</sup>豈<sup>ニ</sup>容<sup>ニ</sup>不<sup>ニ</sup>以<sup>ニ</sup>此<sup>ニ</sup>曰<sup>ニ</sup>固<sup>ニ</sup>導<sup>ニ</sup>乎<sup>ニ</sup>政道<sup>ニ</sup>之<sup>ニ</sup>小補<sup>ニ</sup>且<sup>ニ</sup>嚴<sup>ニ</sup>乎<sup>ニ</sup>來報<sup>ニ</sup>之助業<sup>ニ</sup>也<sup>ニ</sup>哉<sup>ニ</sup>。元禄辛巳二月十八日 獅子谷沙門忍激書

⑨ 『浄土宗全書』第一八卷三三頁上。

⑩ 「誓各捐銀五錢共刻斯觀經玄義分一卷 伏願

回此功德普施法界共生安養齊悟法忍沙門忍微募刻

元禄辛未夏四月十五日師子谷升蓮社識」

「雒陽優婆塞中川氏某喜捨若干金刻此

敕修吉水圓光大師御傳緣起一卷同目錄一卷 伏願以此功德居士及以六親眷屬乃至法界羣類齊超三有苦域頓登九蓮樂邦者

仰冀吉水正宗流通海國一見一聞皆種淨因衆聖護念龍天歡喜風雨以時災厲不起人人皆得無量壽處處悉成安樂國享保二年丁酉之秋九月穀旦 東山獅子谷白蓮社識」

「妙壽冥福共助刻斯

觀經證誠疏四卷 伏願

回此功德普施法界共生安養齊悟法忍

元禄甲戌臘月如來成道日

沙門義山募刻」

⑩ 『法然院光明藏書籍目録稿』による。

⑪ 高雄義堅先生前掲論文と前註⑩の目録より作成した。

巻数なきものは高雄論文による。

⑫ 『大藏經請去總牒』による。法然院も万無寺として一  
大蔵を購入したことがわかる。

### 三 『勸修作福念仏図説』の影響

前述のように『勸修作福念仏図説』はその印施頭初からその受持者が多数現われ、それは近年にまで及んでいることがあきらかとなった。

そのような流布に伴い、日本的、浄土宗的に改変され、受持されてきたものがある。『百万遍念仏図説』と仮りにいうべきものである。

長谷川匡俊先生が、「念仏図類のなかで日本人の作った最初のものではあるまいか」と紹介されている雲洞の『丈六彌陀蓮會講百萬念僧圖説』が独湛の念仏図に触発され印施された『百万遍念仏図説』の第一である。

雲洞（一六六五—一七三六）は廓蓮社然譽光阿見龍といい、頼津の阿弥陀寺第十世である。彼はその伝記によると忍激の弟子の一人と考えられる。いつごろに師弟の關係を結んだのかは不明であるが、元禄七年の項にはつぎのよう  
にいう。

同（元禄）七年師の歳三十。忍澄（激）和尚の命に依て泉浜法行寺に住す。此時一派一箇寺の由緒を坂陽の官廳に訴へ允訴を象る。尔しより餘事に混ぜず獨立の一刹と成す。又事を和尚に啓して永代正五九月の百万遍會を開白せらる。群參席を諍ふ。故に堂前に庇及び榜を構ふ。和尚、師の護法の功をあらはし名牌を法行寺に建て、第五世と定め給ふ。

同じく十年の項には、

同（元禄）十年師の歳三十三、蓮会講序の稿を懷にして獅峯に登り忍澄和尚に謁し素願を陳らる。和尚殊に随喜し給ふ。師、慶喜身にあまり願望成就を祈求して同四月廿四日より五月朔日まで獅谷の別房に籠り七日別時念仏を精修す。

右のように雪洞は、熱心な百万遍念仏実践者であって、そうした実践を重ねるうちに「蓮会講」の構想ができたことがわかる。さらに、雪洞は丈六阿弥陀仏像の造立を発願し、忍激にその旨を話すと、忍激は感心し恵心作の丈六阿弥陀仏の御首を与えた。これにより雪洞が仏工に命じてできたのが現在阿弥陀寺御本尊であり、そのご本尊はし



阿弥陀寺所蔵「丈六弥陀蓮会講百万遍念仏図説」

ばらく天王寺の西方、来迎庵にあったようである。その開眼は元禄十二年正月二十五日であるという。

雪洞は元禄十六年（一七〇三）、三十九歳で軺津阿弥陀寺に晋山した時のことをつぎのように述懐している。

我今師命黙止がたく、ここに住すといへども徳薄く、才短ければ、

させる利生方便もなし。然に此津は四來の商船輻湊の地にして結縁尤ひろし。不断念仏を開白し法音をして絶へざらしめば、往來の商侶、夜泊の船客、海中の鱗甲にいたるまで解脫の勝縁を結ばしめんこと無辺の利益なるべしと。翌宝永元年正月十六日より七日百万念仏を開白として不断念仏を興行せり。

百万遍念仏は迦才の『浄土論』に源を発し、浄土往生の業として説かれ、日本では平安中期以降、これを修した人々の記録が残っている。さらに浄土宗においては知恩寺第八世空円が後醍醐天皇の勅願によりこれを行ひ惡疫の流行を鎮静させ、これをもつて祈禱念仏のはじまりとされていることは、よく知られているところである<sup>④</sup>。

法然においては、『勅修御伝』にいうように<sup>⑤</sup>、あくまでも自身の浄土往生の業として、一念一念の積み重ねを説いているが、近世より如法真修とともに略法草修の百万遍念仏によって祈禱の念仏が全国各地で行なわれていることもよく知られている<sup>⑥</sup>。

このような百万遍念仏に図説をもつて印施普及したのが、雲洞の『百万遍念仏図説』といえる。

この百万念仏は、はじめ阿弥陀仏画像の前で勤修していたようであつて、現在阿弥陀寺にはその画像があり、その裏書にはつぎのようにある。

此丈六彌陀尊者乃是餘所願蓮會講本尊也。元祿癸未冬、依請住此寺。然本佛之像遙在攝州天王寺之西方來迎庵而不能迎此。是故自盡於彼木像以置此寺。冀蓮衆各上心行相續而永無退轉。從今每歲正五九三箇月、於此像前當期七日勤修乎。如法眞讀高聲念佛一百萬遍矣。皆寶永龍集甲申正月百萬回向日。備之後州鞍阿彌陀寺現住雲洞見龍飲誌

このように、それは如法真読の百万遍念仏がこの宝永元年（一七〇四）より正月五月九月に行なわれていくのである。そしてこの同年に独湛の『念仏図』を見るのである。



その経緯を伝記ではつぎのように記している。

○（宝永元年）同年黄檗獨湛禪師、忍澄上人に託し、作福念佛の圖説を印施し給ふ<sup>⑧</sup>。幸に師の百萬念佛圖説元祿十四年に符節を合せたるがごとし、大に喜躍し、疑憚なく師も亦百万図説を印施す。寶永元年より今享保二十一年にいたるまで凡三十三年の間、図説の印施幾千万張といふことをしらず。これを受持して百万念佛を修する行者、その員また算ふべからず。且将来の法化も亦幾何ぞや。近來圖説に和解を加へて念佛図説述贊と名けて印行せり。

この雲洞の念仏図説は写真のように題を「丈六弥陀蓮會講百萬念佛圖説」といい、左右と下段にはつぎのようにある。

#### △右側▽

古曰。彌陀爲父蓮華爲母念佛爲種而往生淨土矣。因造丈六彌陀彫六八宝蓮而爲座臺焉。普勸法界衆生欲使下納各各芳名於彼腹内而坐其座上也。且爲之於三長齋月永修眞讀百萬念佛募化以求於後光幢蓋之嚴飾故設蓮會講也。蓋淨土法門以決定心爲本根焉。熟見三世間或有逢無常而發心念佛等種種行相。雖然觸緣對境無不驚動也。譬如樹葉隨風而動是未要安心念佛也。夫安心者決定心也。今餘所願觀彼丈六殊勝尊像坐於六八宝蓮而人人同在其腹内斯乃極樂界會之人而非娑婆穢土之者一也。譬如移樹根而栽植於木檻中也。如斯安心積功則就聲決定往生矣。當知口稱之全體卽身阿彌陀佛也。

#### △左側▽

元祿辛巳秋做蓮華會序。且設圖説欲廣施于世也。雖然恐二人之不信心而無藏而出之矣。宝永乙酉『勸修作福念仏圖説』の印施と影響

春偶見<sub>ル</sub>黃檗獨湛禪師所<sub>ノ</sub>印施<sub>ニ</sub>之作福念佛圖<sub>ヲ</sub>上與<sub>ニ</sub>愚願<sub>ニ</sub>恰如<sub>ニ</sub>合<sub>ニ</sub>符節<sub>ニ</sub>。因鑲<sub>ニ</sub>梓<sub>ニ</sub>以募化<sub>ス</sub>。所<sub>レ</sub>冀<sub>ニ</sub>社友信<sub>ニ</sub>之也<sub>。</sub>抑<sub>レ</sub>餘圖說百八念珠<sub>ヲ</sub>放光蓋由<sub>ニ</sub>高祖事蹟<sub>ニ</sub>而行者<sub>ヲ</sub>稱名契<sub>ニ</sub>本願念佛<sub>ニ</sub>則從<sub>レ</sub>口必發<sub>ニ</sub>光明<sub>ニ</sub>。是誠名義具足故<sub>也</sub>。內有<sub>ニ</sub>六字者<sub>ヲ</sub>標<sub>ニ</sub>本願念佛元是六字<sub>ニ</sub>稱名<sub>ニ</sub>而名體不離<sub>ニ</sub>之義<sub>ニ</sub>也。又有<sub>ニ</sub>九蓮<sub>ニ</sub>圖<sub>ニ</sub>本蓮者<sub>ヲ</sub>示<sub>ニ</sub>九品皆化<sub>ニ</sub>生<sub>ニ</sub>於彌陀本座<sub>ニ</sub>蓮上<sub>ニ</sub>也。本蓮<sub>ニ</sub>左右書<sub>ニ</sub>真讀念佛百萬行者<sub>ニ</sub>者<sub>ヲ</sub>每<sub>ニ</sub>一聲<sub>ニ</sub>招<sub>ニ</sub>一珠<sub>ニ</sub>而至<sub>ニ</sub>一萬唱<sub>ニ</sub>一填<sub>ニ</sub>一圍<sub>ニ</sub>則百願乃滿<sub>ニ</sub>百萬遍<sub>ニ</sub>宜<sub>ニ</sub>書<sub>ニ</sub>三名於本蓮上<sub>ニ</sub>也。然則從<sub>ニ</sub>佛手<sub>ニ</sub>出<sub>ニ</sub>光攝<sub>ニ</sub>取<sub>ニ</sub>行者<sub>ニ</sub>豈不<sub>ニ</sub>悅乎<sub>。</sub>凡此法流<sub>ニ</sub>傳<sub>ニ</sub>三國<sub>ニ</sub>而利益無量<sub>ナルヲ</sub>則祈禱薦拔皆當<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>之也。

# △下段▽

于茲圖<sub>ニ</sub>蓮座<sub>ニ</sub>蓋準<sub>ニ</sub>蹟師<sub>ニ</sub>蓮華勝會<sub>ニ</sub>意<sub>ニ</sub>示<sub>ニ</sub>蓮會道場<sub>ニ</sub>。且每<sub>ニ</sub>齋月<sub>ニ</sub>修<sub>ニ</sub>百萬<sub>ニ</sub>當<sub>ニ</sub>其滿散<sub>ニ</sub>布<sub>ニ</sub>此蓮座<sub>ニ</sub>而圖札名簿集<sub>ニ</sub>其中<sub>ニ</sub>使<sub>ニ</sub>結緣衆<sub>ニ</sub>齊<sub>ニ</sub>百萬行者<sub>ニ</sub>表<sub>ニ</sub>生佛同體<sub>ニ</sub>之座底<sub>ニ</sub>。加<sub>ニ</sub>稱<sub>ニ</sub>餘從<sub>ニ</sub>發願<sub>ニ</sub>始<sub>ニ</sub>一日<sub>ニ</sub>行<sub>ニ</sub>施餓鬼<sub>ニ</sub>及修<sub>ニ</sub>三季<sub>ニ</sub>鬼祭<sub>ニ</sub>備<sub>ニ</sub>其冥福<sub>ニ</sub>又每歲臨<sub>ニ</sub>臘八<sub>ニ</sub>依<sub>ニ</sub>三十惡懺悔法<sub>ニ</sub>禮<sub>ニ</sub>彌陀<sub>ニ</sub>三千餘。又元祿年中<sub>ニ</sub>以<sub>ニ</sub>此百萬<sub>ニ</sub>開白<sub>ニ</sub>不斷念佛<sub>ニ</sub>。每<sub>ニ</sub>一千日<sub>ニ</sub>建<sub>ニ</sub>厭欣<sub>ニ</sub>旛<sub>ニ</sub>回<sub>ニ</sub>其行業<sub>ニ</sub>及以<sub>ニ</sub>右修善<sub>ニ</sub>恭奉<sub>ニ</sub>三祝<sub>ニ</sub>天下太平武運永久。次咒<sub>ニ</sub>願<sub>ニ</sub>蓮會結緣<sub>ニ</sub>二世安穩五穀成就萬民豊樂。苟<sub>ニ</sub>佛日益<sub>ニ</sub>廓慈光無<sub>ニ</sub>隔<sub>ニ</sub>哀愍覆護<sub>ニ</sub>此世及後生願<sub>ニ</sub>佛常攝受<sub>ニ</sub>矣。寶永丙戌正月吉日然譽雲洞慶謹誌

この識語の下には「備後州鞆津心光山護念院阿弥彌陀寺藏版」と記されている。

この縁起によれば独湛の『勸修作福念仏図説』の刊行がきっかけとなって、雲洞も『念仏図説』を印施したと記している。しかしながら私は雲洞の『念仏図説』そのものも実は忍激あるいは独湛あたりの人たちから、念仏図や功過格などを聞いて雲洞自身が考えていたものであると思うのである。なぜならば雲洞の伝記には忍激を師と仰ぎ求道遍歴する姿が描かれている。さらにその伝記である『雲洞和尚行実』の著者は桂鳳であることによる。法然院の中興二世忍激を師と仰いだ雲洞、さらにその雲洞を師と仰ぐのは法然院中興第八世の桂鳳という関係が堺の法行

寺を中心にまわっているのである。『忍濃和尚行狀記』によると法行寺の創建はつぎのようである。

同五年師三十三歳堺に宗春といふ尼あり本は畑山氏の妻なり。一日世の無常を悟り出家し師の化益を歸依し念佛す。また師の隱遁の志あるを察し依て閑寂の寺を建立し師を開山住持とせんと思ひ其事を具に師に語る。師の曰我不徳なり。何ぞ開山と成べきや。然れども一ヶ寺建立の願をば辭退すべからず。我この事を知恩院の萬無大和尚に啓して大和尚の御影を請じて開山とし我は位牌を建て二代となり。淨福寺の惠順上人を請待して三代目住持とし如法に勤行すべしと申されければ宗春ます／＼歸依し一ヶ寺建立の願決定す。師またをもへり契經に新に寺を造る功德よりは故き寺を再建修覆するにしかずとあり。故に廢寺を再興せんと思ひ同六年師三十四歳知恩院に上り萬無大和尚に拜謁し宗春の心願を演らるゝに大和尚聞て喜び即ち末寺の宗仲寺といふ廢壞の寺號を法行寺と改め圓戒道場の酒肉五辛禁制の石碑を許し永式を定めまた金繡の袈裟を賜ふて開山とならんとの尊命を蒙り堺に歸り信尼に告らる。信尼喜び師の指圖を守り再建し供料を寄附して檀越の資とす。本尊阿彌陀如來は師惠心僧都の作の半面を得て悦びまた半面なきことを歎き居れけるが翌年また半面を得て喜び大きさといひ相好といひ似させ玉ふゆゑにこれを合せ見らるゝに寸分のちがひなくあひあふ見聞の人奇異の想をなす。師喜び即ち佛師に命し御身と座光等を作らせ莊嚴して法行寺の本尊とせり。この寺後に獅谷の末寺となり。同七年師三十五歳法行寺にて善導大師の傳を集め別傳に註釋を加へ印刻して大師千年忌報恩のために弘通せらる。この別傳纂註二卷わづか三十日の述作なれども能く善つくし美つくせり。門弟たるものは拜見すべし。

そこへ、忍濃の命により法行寺第五世となつて雲洞は元祿七年（一六九四）に晋山する。この頃にはすでに法然院と本来關係がはっきりとしていたやうで元祿八年の『手鑑』<sup>⑨</sup>に、

慈福山（菴）

本寺京獅子谷法然院  
淨土宗法行寺

と記されている。

そして享保二十年（一七三五）年、桂鳳は雲洞の念仏図説に対してその『述讀』を著わし、さらに元文元年（一七三六）に『雲洞和尚行実』を著わすのであるが、二書の奥付によっていづれも法行寺に桂鳳が住居していたことがわかる。

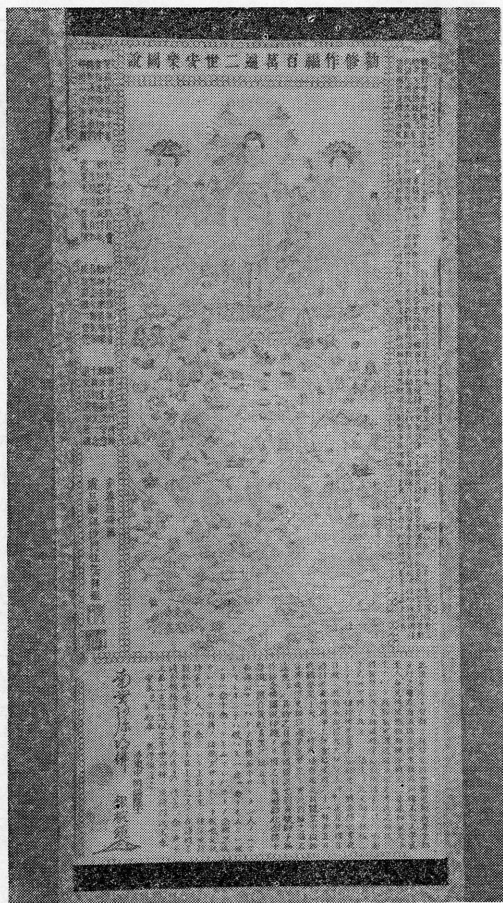
このような間柄であつたからこそ、桂鳳は雲洞の没後わずか十ヶ月のうちに師の伝記を編纂刊行したり、その著『現証往生伝』には軼津や雲洞の縁故者を登場させているわけである。なかでも信女蓮月の往生によって夫祐信は雲洞に全帛を喜捨した、とあり雲洞はそれをもって阿弥陀寺に當麻曼荼羅一鋪を購入したという。

以上、流々述べてきたが、雲洞が忍激のそばにあり、又黄檗僧との親交もあつたと考えられるから、当然、当時中国で流行していた念仏図の存在は聞いていたものと思われる。そのような影響をうけて『図説』でいうように自分なりに考案し百万遍念仏図説をつくつたものであらう。それは桂鳳が述べるように、「かれは作福をかね、これは専修をすすむ、これその異なり」<sup>⑩</sup>と述べる違いとなるのである。

この雲洞の百万遍念仏図説と同様のものが二本ある。

一本は早稲田大学ゴルドン文庫にある享保年中に印施されたもので武江明頭山二世祐海識語のものである。これは「勸修百万遍十界一心願生西方作福念仏圖説」といい、中央上段には當麻曼荼羅中台の三尊像を描き、中段には極楽の蓮池を描き、下段には願往生者が二尊、六方諸仏から証誠護念されている図があり、それを三方から取りかこむようになっている。<sup>⑪</sup>

もう一本は独湛の念仏図説として大賀一郎先生がいわれたものである。この題は「勸修作福百万遍二世安楽図説」という。弥陀三尊像と往生者を中央に描き、右縁は『観無量寿経』の上品上生の段を抄録し、左縁には独湛の



黄檗堂所蔵「勸修作福百万遍二世安楽図説」

詩を四首のせ、下縁には銀碗鏡の識語をのせている。<sup>13)</sup>

以上の諸本の他に百万遍の図説を簡略化したものが常陸国月山寺にて「百万遍念仏の御影」として授与されており、洛陽天性寺においても同様のものがあるから、これら「百万遍念仏図説」も近年に至るまで広く用いられていたことがわかるのである。



町期文明年中にはじまる釘念仏が報告されている。その縁起は元禄五年（一六九二）に改裝されているが、そこには五輪塔に四九の穴があいている札のあることを記しているから、念仏図類ではこの釘念仏の方がはよいであろう。

③ 『雲洞和尚行実』 一卷 桂鳳撰。

④ 『民間念仏信仰の研究』 資料篇三七頁、五六〇頁。

⑤ 第三卷「百万遍の事」の項参照。

⑥ 註④三七・四二頁。

⑦ 宝永甲申年は元年であるが、それは三月一三日から正月はまだ元禄一七年のうちである。

⑧ 披見したもののうち宝永元年本は獅子林蔵版であつて、獅谷本は未見である。しかし、忍濺の識語が宝永三年であるから、忍濺印施本はやはり宝永三年本とみるべきであらう。

⑨ 『手鑑』 《堺市史》 卷第五、六三頁。）

⑩ 妙供、妙本、妙生、榮寿、肇寛。

⑪ 『念仏図説述讀』 卷下一丁オ。

⑫ その説明はつぎのようである。

勸修百万遍十界一心願生西方作福念佛圖説

勸修圖説意趣酬三人謂也、勸修、化導、百万遍、數量、其來由支那道生、信、道綽、教、七日七夜無間修得、大往

『勸修作福念仏図説』の印施と影響

益、元祖曰、百萬遍非佛願、然小經若一日乃至七日念佛申人生極樂、説、七日念佛可申、七日念佛、程當百萬遍、故人師釋也、余、七日不絶者、八日九日可申、亦百萬遍不申人非謂不往生、一念十念往生、然、一念十念、住生、程思念佛、重百萬遍功德也、矣、後白河法皇修、百萬遍二百余度、積功無比、今人縱重月可修、是皆臨時別行、日本流世始善阿、弘元元年疫厲天命祈禱起寺勅號百萬遍、賜弘法利劍名號、故唱門門不同文、與願以此功德文等式如、彼緣起、期必生、人自獲現益、釋稱念阿弥陀佛、願生淨土、二者現生即得延生轉壽、不遭九橫之難、矣、故念佛、無非業死、二世益明、十界六道四聖、一心衆生、一心、謂一切衆生心性具善惡、妄流六道、真登四聖、故、貫十界、復通十方、鬼佛有心、當求佛土、余一切佛土皆嚴淨、凡夫乱想惡難生、故釋尊悲愍、從是西方直指西方、簡餘九域、行者信聞、餘九方佛刹、自離六凡三聖、心單願生西方極樂世界、綽曰、當今末法現是五濁惡世、唯有淨土一門可通入路、矣、願生西方、十方菩薩、乘人天五乘齊入、上尽一形、下至一聲、逆惡回心、滅罪得生、超世別願、易行妙術、不簡作業、萬機普益、作福具作福德、因義、謂欲勤念佛、得果德、念佛、稱名、圖説、書文、南無阿弥陀佛、弥陀本願万善所具名號是其行、願往生一心

横具三心、願三往生、心無二偽疑、横具三心、元祖曰、下智愚鈍輩猶踏三心名義、然稱弥陀名號者必得三往生、信、自然三心具足矣、如是心行具足、來佛願、故不論罪福多少、臨終拜三來迎、歡喜命終須臾到彼、極樂無為、微妙嚴淨、身相神智萬德具成、十萬來生、心悅清淨、快樂無窮、三界六道火宅快哉、今始值三欲三速去二者、入三專修門、厭欣作福唯能念佛、畧鈔又註圖

念佛千聲填二星、白黃赤青黑五次也、極略脫筆、千字全同三星數、追加九中三雲黑黃白、蓮肉色、中央名號摸三開山筆、享保年中 武江明顯山二世祐海

識

此圖者有、黃檗獅子林、鑒宗四世獨湛和尚、生知安行之權者而誠顯、示西來教外別傳不立文字直至人身見性成佛祖師禪、淨穢不二娑婆即寂光淨土、ナツテ爲歸宿、可謂超過永明之角虎之禪、故三國無雙法然大師識得安心、而所謂念仏法門如圓光大師可修、九月

獨湛、此文獅子林板ニシテアリ恆持三佛號、息不虛、駐、是ソ臍念佛也晝夜口稱三昧而全如三圓光大師、寶永甲申正月廿四日語曰昨夜神遊淨土、即奮起禮、西方二十一拜廿五日晚鶴聲聞、于天、二小侍者怪而趨、庭則聞、空中微妙音、其夜深更師曰適夢蓮華生于寶池、西歸之期不遠也云云其時之自画自讃圖說也前黃檗獅子谷作福

念佛圖說、印施アリ因之百萬遍勸化念佛十聲填、一、白黃紅青黑可填五次、

御傳云サレハトテ百萬遍申サムラン人ノムマルマシキニテハ候ハス一念十念、テモマレ候アリ一念十念ニテモマレ候、ホトノ念佛思候ウレシサニ百萬ノ功德、カサヌルニテ候也、是執持名号ノ人ハ一念ニシテ上品上生ニ住生也、故圖鉢相モ也マタ左、觀經、上品上生之文アリ、右詩四アリ、詩念佛情法ナリ是人々の有もの情にて一念一声ニテ上品上生往生依之平世迎接ノ現證圖說玉也

安永巳亥 初春 無德慎謹誌

洛東中岡崎隱士

南無阿弥陀佛

銀碗鏡 花押

筆端依正重々素

引到娑婆路自覺

即今便作無常看

跳出娑婆何所歸

實相元湏變相中

對境思歸長計掛

動靜去來皆極樂

歸元直指此中意

傳取蓮邦來桑國

一生精進只自知

吾無去今佛無來

十萬利塵元一念

神通不亞淨名翁

究竟未慣菩薩債

成就圓融一寶覺

道交感應難思議

安養迎接圖

震旦嗣祖沙門性瑩拜題

みぎの御伝は『勅修御伝』卷第二三より拔出している。



⑭『民間念仏信仰の研究』二三六～三三七頁。

## おわりに

以上、忍激を中心に『勸修作福念仏図説』の印施と近年にまで及ぶ多大な影響を述べた。『勸修作福念仏図説』は功過格と表裏一体の関係を保ち中国で行なわれ、独湛を通じて忍激も心酔するようになるのである。忍激が開版した先達の著書のうち、浄土宗僧侶として善導集記『観無量寿経疏』、良忠撰述『選択伝弘決疑鈔』などがあり、個人的な信仰の発露として雲棲著『自知録』、袁了凡著『陰陽録』等の出版があるのであり、まさにその両者をつなぐ橋のような存在が、この『勸修作福念仏図説』の印施であったといえよう。

## 付記

この論文を作成するにあたり、資料収集に所蔵者各位のご協力を得ました。なかでもご多繁のなか阿弥陀寺吉浦宏栄上人は雲洞上人に関する資料を、黄檗堂山本一億和尚には『勸修作福念仏図説』諸本を呈示していただきました。ここに皆様へ深甚の謝意を表します。

(文学部助手)

